論理的に考えを形成する国語科学習指導の在り方（第二年次）
―「理由」の適切さを検討させる学習活動を通して―

郡山市立郡山第二中学校　教諭　佐藤　聡嗣

１　研究の趣旨

中学校学習指導要領では，各領域における学習過程が整理され，「読むこと」領域においては，「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成，共有」の３つの段階が明示された。また，すべての領域において考えを形成する学習過程が重視され，「考えの形成」に関する指導事項が位置付けられた。同解説国語編では，「考えの形成」を「文章の構造と内容を捉え，精査・解釈することを通して理解したことに基づいて，自分の既有の知識や様々な経験と結び付けて考えをまとめたり広げたり深めたりしていくこと」と示している。

しかし，自身の授業を振り返ると，「読むこと」の学習において，自分の考えを広げたり深めたりすることができない生徒が多く見られた。これは，叙述と自分の既有の知識や様々な経験と結び付けて考えることができないため，表面的な理解にとどまっているからだと考えられる。以上のことから，学習を通して理解したことを，既有の知識や様々な経験と結び付けて考えを広げたり深めたりすることができる生徒を育てたいと考えた。本研究では，これを「論理的に考えを形成する姿」としてとらえる。論理的に考えを形成するためには，叙述や事実である「根拠」を明確にして，既有の知識や様々な経験と結び付けた「理由」を示して自分の「主張」を表す必要がある。

第一年次研究においても，「読むこと」領域の学習過程を通して理解したことを既有の知識や様々な経験と結び付ける力を育てるために，単元末に「根拠」と「理由」を明確にして自分の考えをまとめる授業実践を行った。その結果，自分の考えを表すときに，「根拠」や「理由」を明確に示す生徒が増えた。しかしながら，生徒の「理由」を分析すると，抽象的，主観的な内容で，他を納得させるに十分ではないものも多く見られた。そこで，第二年次研究では，特に「理由」に着目して研究を進める。そして，学習を通して理解したことを既有の知識や様々な経験と結び付け，「論理的に考えを形成する」ための手立てを講じる。その際，生徒が互いにどのような「理由」が適切かを検討することを通して，論理的に考えを形成する生徒を育てたい。

「読むこと」領域の指導において，以下の手立てを講じれば，生徒一人一人の論理的に考えを形成する力を育成することができるであろう。
【手立て１】「精査・解釈」場面で学んだことを「考えの形成」場面につなげる学習過程の工夫
【手立て２】「理由」の適切さ※1を生徒が互いに比較・検討する場面の設定

※１　本研究では，「理由」の適切さの視点を，客観性，具体性，妥当性とする。

２　研究の概要

(1)【手立て１】「精査・解釈」場面で学んだことを「考えの形成」場面につなげる学習過程の工夫

「精査・解釈」とは，「文章の内容や形式に着目して読み，目的に応じて意味付けたり考えたりすること」である。「精査・解釈」場面では，作品の登場人物の言動の意味や描写の仕方などの表現の効果について考える際に，本文中の「根拠」を基に，既有の知識や様々な経験である「理由」と結び付けて解釈する。

作品の魅力を考える「考えの形成」場面では，「精査・解釈」場面で解釈した内容を基に，再び自分の既有の知識や様々な経験と結び付けながら作品の魅力を主張する。このように，「根拠」「理由」「主張」の枠組みを利用して，繰り返し表していくことで，論理的に考えを形成する力を高めていく。

(2)【手立て２】「理由」の適切さを比較・検討する場面の設定

登場人物の言動の意味や描写の仕方等の表現の効果について，それぞれの考えの中の「理由」をグループ内で比較・検討する場面を設定する。その際，適切な「理由」になっているかを客観性，具体性，妥当性の視点で検討する。そのことによって，それらが適切な「理由」であるために必要なものであることを学級全体で共有していく。

３　成果と今後の課題

(1) 研究の成果

全国学力・学習状況調査を用いた事前・事後テストの結果から，「考えの形成」の力を高めることができることが分かった。

単元末に記述させた生徒の考えを分析したところ，自分の考えを述べる際に，読んで理解したことと既有の知識や様々な経験を結び付ける生徒が増えた。

(2) 今後の課題

「自分が考えていることは明確にあるけど，そう考えた理由を文章にすることが難しくて困った」と振り返った生徒がいた。本研究の成果を生かしつつ，自分の考えを形成し，表現させる研究を進めたい。